

ノーベル賞効果の光と影

日本のノーベル賞受賞者は、欧米の受賞者とは比較にならないほどの有名人だ。彼らは、世間にプラスの影響を与えたいという望みと、個人のプライバシー問題の折り合いをどのようにつけているのだろうか。David Cyranoskiが報告する。

原文：Star quality

Nature Vol.427(282-283)/22 January 2004; www.naturejpn.com/digest

江崎玲於奈は半導体における電子のトンネル効果に関する研究で、1973年のノーベル物理学賞を受賞した。約30年たった現在でも、周囲は放っておいてくれない。2000年に東京でちょっとした機会に本誌記者が正式なインタビューを申し込んだところ、丁寧に断られた。「ここ数か月間はかなり忙しいのです」と、江崎は詫びた。講演などの予定で埋まったスケジュールに加えて、芝浦工業大学の学長という公務のために、わずかな時間も捻出できないのだ。「日本のノーベル賞受賞者の義務のようなものです」と、江崎は説明する。

そして今日、この義務を果たす人物は他に数人存在する。2000年から2002年の間に4人の日本人が立て続けにノーベル賞を受賞した。この数はそれ以前の100年間に日本人研究者が得たノーベル賞の総数よりも、1個少ないだけだ。興味深いことに、この受賞ラッシュが起きたのは、政府が今後50年間に30個のノーベル賞を獲得することを目標に掲げた直後だった(Nature 413, 560-564; 2001)。

これに直接の因果関係はおそらくないだろう。だが、ノーベル賞の連続受賞は国内メディアから熱狂的な注目を集めてきた。最近の4人の受賞者は国内でおなじみの名前になり、受賞者の私生活への国民の好奇心は果てしがたい。受賞者の趣味、好きな食べ物、果ては家庭生活までもが、雑誌の記事やテレビ番組の対象となる。

熱狂的な報道には、ありがたい面もあれば、そうでない面もあると受賞者たちは語る。ノーベル賞の受賞は、長引く経済的不況で内省的な日々を送る国民にとって、待望の明るい話題となった。特に受賞者たちは、一連の報道が削減傾向のある研究費の確保に一役買い、理系コースを嫌う傾向にあった学生たちの関心を復活させていると確信している。「お

しなべて言えば、プラスの面が非常に大きい」と語るのは、名古屋大学の野依良治だ。彼は立体的に非対称な関係にある分子の選択的合成法の開発で、2001年の化学賞を受賞した。だが研究者がタレントのように扱われる状況には代償があると、野依は警告する。「受賞者をめぐる昨今の扱いは、科学のイメージを損ないかねない」

加熱する報道

最近の4人の受賞者は、ただの娯楽になりがちに加熱した報道への準備ができていなかったと言える。2003年の正月に放映されたテレビ番組では、小柴昌俊と夫人が紹介された。彼は、ニュートリノと呼ばれる検出の困難な素粒子の存在を確認した研究で2002年の物理学賞を受賞した。番組は「苦労話や意外な好物、ご家庭での小柴さんの表情」といった内容で放映された。小柴にまつわるこの手の話は、すでにあちこちで報じられていた。「出演した番組はあまりにも多いから、どの番組のことを言われているのか忘れてしまうよ」と、彼は言う。

大きな生体分子を調べる質量分析法の開発で2002年の化学賞を受賞した、島津製作所の田中耕一も同じような体験をした。「メディアは、私の生活やら普段食べているものなど、あらゆることを知りたがりました」と、田中は述懐する。「ノーベル賞受賞者は、スポーツのスター選手のような、常人とは全く違う種類の間人として扱われるのです」

4人の新しい有名人のなかでも特に田中は、テレビ番組制作者や雑誌編集者のお気に入りだ。それまで無名だった企業研究者がいまや、努力と謙虚さの象徴となり、毀誉褒貶の激しい有名人の世界にあって、地味なスターの地位を獲得したのだ。例えば週刊誌AERAは2002年12月、田中氏がお見合いで結婚し

たという話を取り上げた。記事では、お見合いで「田中さんの」男性を振って後悔した女性たちについて書かれていた。田中さんのような男性の魅力を見極めることができれば、いい結婚ができるかもしれないというわけだ。

日本におけるノーベル賞受賞者の有名人扱いは、国内の受賞者にとどまらない。細胞内でエネルギー貯蔵分子ATPが作られる仕組みに関する研究で1997年の化学賞を受賞した、英国医学研究会議(MRC)ダン栄養部会長のJohn Walkerは、日本で行った講演がテレビ放映されたことに驚いた。英国メディアによる自国の受賞者への扱いとは対照的だったからだ。「英国では有名人扱いされる受賞者は一人もいません」と、Walkerは述べている。「それが日本では、スパイスガールズ(英国の人気ポップグループ)と私を比較したコメントを言う人もいたのです」

だが日本人受賞者たちが心から欲しているのは、Walkerが未だ保っていられる匿名性だ。例えば野依は、微妙な化学反応を理解できるという理由で、マスコミからワインの好みを尋ねられて恥をかいたことがある。「ワインは好んで飲みますが、専門家というわけではありません」と、彼は語る。田中も自分が扱われるやり方にうんざりしている。「まるでテレビタレントなみです」と言う。「タレントは私生活を売るのが仕事だが、私はそうではない。今でも不思議に思いますが、どうして私が写真を撮られなくてはならないのでしょうか」

商売人も受賞者の威光にあやかろうとしている。インタビューの席で、昆布やある種の飲み物をよく口にすると話した後に、関連する製品が詰め込まれた箱が田中の元に届いた。「企業から届く荷物については、お礼の手紙を書けません」と彼は言う。「製品を宣伝

▶ するような手紙として、利用されてしまうでしょう」

その後の展開

ついに田中は、科学技術への支援に関係のない依頼は断ることにした。また野依は、あるバラエティ番組における田中の扱いに辟易して、テレビ局に抗議の電話をかけた。「田中氏の努力と業績に対する尊敬の念を、番組制作者たちに持ってほしい」

こうした落ち着いた経験にもかかわらず、4人の受賞者たちは、科学の魅力をかき立てる立場にあることには満足している。ノーベル賞を切望していた国民は飽くことなく、次の受賞者の出現を待ちわびている。そして突如として、多くの日本人が自国の科学を一層強くするにはどうしたらよいかということを経験するようになったのだ。

3人の受賞者には、影響力のある立場への大きな転身という効果があった。2000年夏に白川英樹は筑波大学の定年を静かに迎える準備をしていたのが、その秋には導電性プラスチックの研究でノーベル化学賞を受賞することになった。2001年5月に本誌記者が訪問したとき、白川は東京にある政府の建物の中に事務所を与えられていた。総合科学技術会議議員の一人として月一度、首相を交えた会議に参加することになっていたのだ。「こんな立場になるとは想像していなかった」と、白川は語った。

野依は2003年10月に理化学研究所・理事長に就任した。また田中は今年初めに、勤務先の島津製作所が設立した研究所の所長職を引き受け、初年度の予算として2億円がついた。田中は、研究所の名称「田中耕一記念質量分析研究所」にやや違和感を感じている。「研究所の名前を言う必要があるときには、前半部分は省略します」と言う。

こうした影響力のある立場から、また思いがけないメディアとの遭遇から受賞者たちは、若手研究者への支援の拡大と独立の必要性を訴えている。長年にわたって、日本の指導的立場にある研究者たちが、国内研究施設における革新的研究のために最も克服すべき課題と指摘してきたことだ。野依は、受賞前から政策策定委員として活動していたが、受賞をきっかけに生まれた世間の関心が、国家予算の全体的な縮小にもかかわらず科学予算の

微増に役立ったと信じている。

企業の研究者たちは、とりわけ田中の受賞に喜んでいる。バブルの時期には潤沢だった研究費も近年では、リストラと予算縮小のおりを受けているし、多くの企業研究者に新発見の能力があると認められることはほとんどなかったからだ。「企業に創造的な研究者がいないと思われていたことには、本当に驚いた」と、田中は語る。「私の場合は、まるで新種の生物を発見したような扱いでした。裏方的な立場にいる人たちの努力に思いを馳せてほしいと思います」

こうしたメッセージは受け入れられつつあるようだ。「田中氏のノーベル賞受賞はとても刺激になっている。とりわけ若手研究者たちを大いに勇気づけている」と語るのは、NEC基礎研究所(つくば市)の曾根純一だ。一連の受賞は「国内の他の優れた企業研究にも光を当てることになる」と、曾根は期待を寄せている。

ノーベル賞報道の結果として最もよかったのは、若い日本人が科学を学ぼうとする意欲が再び高まったことだろう。小柴はノーベル賞受賞をねらう次世代の科学者を育てるために、ノーベル賞の賞金全額の4,000万円を投じて、理数科教師の養成と教材開発を目的とした財団(平成基礎科学財団)を設立した。ニュートリノを検出した光電子増倍管を製作した浜松ホトニクスは同財団に6,000万円を寄付し、ほかにも多くの寄付が寄せられている。「日本中から広い支援が得られている」と、小柴は語っている。

もっと重要なことは、国民の考え方の変化かもしれない。ここ数年の調査では、日本の若者が理数系学問に寄せる関心は低下の一途をたどっていた。受賞ラッシュをめぐる熱狂がこの傾向を逆転できるのかはまだわからないが、ある調査では明るい兆しが見え始めている。第一生命は国内の小学生に将来の夢を尋ねる調査を1989年から毎年実施しているが、最新の結果では、男の子の将来の夢の第1位を初めて「学者・博士」が占めた。野球やサッカーのスター選手も抜いたのだ。 ■

David Cyranoskilはネイチャーのアジアパシフィック特派員。

Nature Publishing Group makes an IMPACT



インパクトがある雑誌は、
Nature です。

2002年度、*Nature* のインパクト・ファクターは30.432でした。もちろんmulti-disciplinaryジャーナルのナンバー1です。

nature publishing group 